Ｎｏ．５０３【２０２２年５月６日配信】

太宰治『津軽』と「青森開港」（担当：工藤大輔）

こんにちは！　室長の工藤です。

先日、太宰治の『津軽』に目を通していたら、青森市の歴史にまつわる面白い記述をみつけたので、少し長いですが以下に引用します。なお、引用は筑摩書房から平成 10 年（1998）に刊行された『太宰治全集８』からで、一部の漢字は常用漢字に改めています。

> この海岸の小都会は、青森市である。津軽第一の海港にしようとして、外ヶ浜奉行がその経営に着手したのは寛永元年である。ざつと三百二十年ほど前である。当時、すでに人家が千軒くらゐあつたといふ。それから近江、越前、越後、加賀、能登、若狭などとさかんに船で交通をはじめて次第に栄え、外ヶ浜に於いて最も殷賑の要港となり、（以下略）

太宰治がいわゆる「青森開港（青森の町づくり）」について書いているとは思いもよりませんでした。しかも「開港（本文では「経営に着手」）」の年代を「寛永元年」としているのは見逃せない部分です。一体「ネタ本はなんだろう」…という思いで『津軽』を読み進めて行くと、意外と簡単に答えに行き当たりました。竹内運平『青森県通史』（東奥日報社　1941 年）でした。『津軽』（『新風土記叢書』第 7 巻）の発刊年は昭和 19 年（1944）ですから、時間的な矛盾もありません。

太宰治
（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より）

この時点までに青森県の歴史を綴った本はいくつか刊行されています。にも関わらず『青森県通史』が選ばれたのは、当時においては最新の刊行物であったからだと考えています。ですから、太宰は「最新の研究成果」でもってこの部分を執筆したと言えるのです。

そこで注目されるのが「寛永元年」という年代なのです。

異論はあるかもしれませんが、明治末期以降、「青森開港」の年代は「寛永 2 年」が通説であったと私は考えています。ところが、『津軽』が発刊された頃、この通説が一部で大きく揺らいでいたのです。というのは、昭和 8 年から青森郷土会の機関誌『郷土誌うとう』に「寛永元年」を説く論者が複数現れ、それが勢いに乗ります。たとえば、寛永 2 年説を採用していた青森市の刊行物においても、昭和 12 年頃から寛永元年説に変わります。さらに、『青森県通史』の著者竹内運平はもともと寛永元年説を容れてはいませんでした。しかし、『青森県通史』では寛永元年説に飲み込まれてしまったのです。

ですから、『津軽』のこの一節は、図らずも当時の郷土史研究の「お家事情」を映し出していたといえるのです。